フタオビコヤガ（イネアオムシ）

１　見分け方

成虫（フタオビコヤガ）の体長は雌（写真１）が８～ 10mm、雄が６～８ mm で雌がやや大きい。体色は黄褐色で前翅に暗褐色の太いすじが２条あり、雌のすじは雄より不明瞭である。幼虫（イネアオムシ　写真２）は淡緑色でシャクトリムシ状に歩行し、成熟した幼虫の体長は 20 ～ 22mm である。

写真１　雌成虫

写真２　幼虫

２　発生のようす

幼虫は乾燥条件に弱く、若齢幼虫期に曇雨天日が多いと発生量が多く、冷害年に被害が目立つ。また山沿いや堤防沿いなど風通しの悪い本田で多発しやすい。本種は蛹で越冬、５月頃羽化しイネの葉裏に数粒ずつ列状に産卵する。ふ化幼虫はイネの葉を食害し成熟した後、イネの葉でちまき状のツト※（写真３）をつくり、その中で蛹化する（写真４）。

福島県内での発生回数は年３～４回で、７月～８月の発生が目立つが、高冷地等では６月に第１世代の被害が見られる。

写真３　水面上のツト

写真４　ツト中の蛹

※ツト　藁や竹皮を編み束ねてつくった容器のこと。転じて昆虫等が葉を束ねて巣にしたものをいう。

３　被害のようす

若齢幼虫は、イネの葉の表面を片側から食害し、葉身に白いかすり状の食痕（写真５）ができる。中齢以降の幼虫は葉の縁から食害し、食痕は階段状（写真６）となる。多発水田では葉身が食い尽くされる場合もある。

写真５　かすり状の食害痕

写真６　被害葉

４　防除

幼虫の発生に注意し、発生が見られた場合防除を行う。第２～３世代幼虫の薬剤防除時期の目安は７月上旬から８月上旬である。幼穂形成期以降、特に出穂期前後の加害は収量に影響する。なお育苗箱施用剤も市販されている。薬剤防除については「福島県農作物病害虫防除指針」及び当ホームページ「水稲の病害虫防除対策」を参照してください。